

ペテルブルグ文化史家 A. M. コネーチヌイのこと

坂内徳明

I

著者はソビエト民俗（族）学の動向に関する旧稿で、民俗学・民族学を中心としたソ連の人文研究が1960-1980年代に大きな「うねり」を経験していたとの仮説にもとづき、その全体的潮流を素描したことがある⁽¹⁾。その際、「儀礼・神話研究」「都市民族学」「トータルな農民生活誌」に着目し、それらが「新たなロシア民衆文化史像」を提起する試みであるとした。この中の「都市民族（俗）学」との関連で、革命前ペテルブルグの祝祭・娯楽文化史の分野のパイオニアとしてソビエト末期から活躍したコネーチヌイ氏の仕事の概観が本ノートの目的である。

II

1935年5月生まれのアルビン・ミハイロヴィチ・コネーチヌイは、国立レニングラード史博物館と芸術史研究所の勤務経験を有するにもかかわらず、スタートはいわゆるアカデミズムの枠にない。彼が既存のアカデミズムに依拠せず、自身の知的探求心のみに従って調査・研究を進めてきた姿勢は現在もまったく変わらない。このことは彼の著作リスト⁽²⁾に明らかである。

彼の研究活動は19世紀末—20世紀初頭に活躍した象徴派詩人 A. ブロークと作家ドストエフスキイに始まるが、それは文学論や作品分析ではなく、彼らの足跡、住まいや移動を論じたもの1・2・3・4・10・14・16・17・18・24、同時代人の書簡・日記の翻刻20・21、詩人のギムナジウム時代の関連資料紹介32、コメンタ

(1) 拙稿「現代ソ連におけるロシア・フォークロア学の動向とその問題点」『一橋大学研究年報 社会学研究』23 (1985)。

(2) コネーチヌイの著作リストは『近代ロシア文学創成の環境——貴族屋敷（ウサーヂバ）の文化的・社会的ランドシャフト』（科学研究費成果報告書、代表者坂内徳明、2015）に掲載。以下、その番号を1・2・…で示す。

リー・索引作成 19, 著作集の索引作成 23 等どれも書誌学的仕事である。この基礎的な調査にもとづく成果が、生誕 100 年を記念して 1980 年 11 月に開館されたブローク博物館の設営準備への参加につながった（当時、国立レニングラード史博物館勤務）。

文学者や文学作品にたいする関心の成果は、後述の亡命作家の回想・自伝の場合を除き、多くない——ドストエフスキイの『罪と罰』舞台のトポスの詳細な調査として多くの反響を呼んだ論考 11（クセーニヤ・クンパンと共著）、詩人 M. ヴォローシンの文章へのコメントリー 34、事典『ロシアの作家 1800-1917』の項目執筆 35・36・37・44 等。著作リストで見逃せないのは、ドストエフスキイの兄ミハイルの書簡翻刻 20（クンパンと共著）である。ミハイルの父親宛書簡（1839 年 2 月 24 日付）の注に「モスクワ川の定期市見世物小屋と人形劇に出掛けたことは兄弟の子供時代の輝かしい思い出」と記され、ここに、民衆演劇・大衆文化へのコネーチヌイの関心の萌芽⁽³⁾を確認できる。

ブロークとドストエフスキイをペテルブルグの作家と断言することに異論があるかもしれないが、この二人にコネーチヌイが着目したのは偶然でない。アルハンゲリスク生まれで、ペテルブルグっ子ではないが、これまで通算 40 年以上（1947-48、1973 年から現在まで）をこの地で暮らし、偏愛するこの町の隅々を歩き回り、多くの文献・ヴィジュアル資料を渉猟してきた彼がペテルブルグ文化史構築に至ったのは自然である。最初に選択された対象は、革命前に市内の主要な広場・通りで開催された祝祭（ロシア語でナロードノエ・グリャーニエ）である⁽⁴⁾。この祝祭とそこで披露される各種娯楽（見世物小屋芝居の上演、呼び込みの口上・かけあい・寸劇、人形芝居、覗きからくり〔箱画面に投影されるパノラマ＝^{ルボーク}風俗版画〕、

(3) 民衆演劇にたいする関心は、彼の話によれば、ロトマンからの質問（ブロークの「見世物小屋」に関するゼミナール（？）の際、見世物小屋のファクトについて何を知っているか）に答えられなかったことに始まるという。

(4) その全体像は A. Ф. ネクリローヴァのモノグラフ *Русские народные городские праздники, увеселения и зрелища*. 1984（拙訳『ロシアの緑日』）が今なお「古典」。さらに拙稿「ペテルブルクのナロードノエ・グリャーニエ——18 世紀末～20 世紀初頭」『ロシア史研究』43（1986）を参照。研究史は、拙稿「ソビエトにおけるナロードノエ・グリャーニエ（民衆遊歩）研究の現段階と今後の方向」『一橋論叢』89-5（1983）。

物売りの言葉等々)は、その重要性が断片的に指摘されていたが⁽⁵⁾、全容は明らかにされていなかった。それどころか、具体的事実(この広場の祝祭はいつ、どこで行われたか、全体の規模と設営、遊戯施設、興行主、参加者、各種芝居と娯楽のレパートリー等々)さえあいまいだった。

こうした状況を打破すべく、コネーチヌイはまったく単独で調査に着手する。彼の資料探索と研究は1970年代末から1980年代前半に展開され、1985年段階で核心部分の調査を終えて全容がほぼ明らかになっていた。その象徴的出来事は1984年11月から翌年4月まで、国立レニングラード史博物館で開催された「ペテルブルグのナロードノエ・グリャーニエと娯楽 18世紀末—20世紀初頭」展である⁽⁶⁾。約150点の資料が展示されたこの展覧会については彼自身の文章27に詳しいが、一つのエピソードを紹介すると、評判となった展示品の一つにグリャーニエ全体の模型(84×43 cm)があった。これは、見世物小屋演出家 A. Я. アレクセーエフ＝ヤコヴレフ(1850–1939)が1920年代末に自身の記憶によって製作し、サーカス芸術博物館で一時期展示されたが、その後、行方不明となっていたものをコネーチヌイが同博物館の収蔵資料の中から発見したものだだったという⁽⁷⁾。

革命前ペテルブルグ市内に現出した祝祭・遊戯空間としてのグリャーニエと各種娯楽に関するコネーチヌイの仕事は多い26・30・39・40、30ページを越える40は市内の主なグリャーニエの全体像を示す労作だが、未刊行文書や各種ヴィジュアル資料、それまでほとんど省みられなかった定期刊行物内の小さな記事を含む多くの文献が網羅・検証された。記述は実証性が高く、事実の忠実な再構成である。グリャーニエ関連の仕事として、見世物小屋の概観26、見世物小屋関連資料(A. II. レイフェルトの著作ならびにアレクセーエフの回想)の翻刻と序論62、視

(5) 「^{いち}市のフォークロア」の重要性を強調したビョートル・ボガティリョフ、それを継承したネクリローヴァの仕事。

(6) 彼の言葉によれば、展覧会ならびに彼の報告を契機に「大きなスキャンダルが起きた」が、ロトマン、キリル・チストフ、ボリス・エゴロフらが弁護した。それは「文化当局役人たちのペテルブルグの民衆祝祭にたいする完全な無理解と拒絶」(82, c. 9) への反撃だったという。

(7) これは E. M. クズネツォフにより展示不許可とされていた資料の中に長期間放置されていたが、1983年に博物館員の厚意で資料調査を許されたコネーチヌイが数週間の調査時に埃の中から見出した(彼の話による)。

きからくりの絵と口上テキスト、レパートリーに関する資料集と序論 39・67、公刊・未刊資料の再録・翻刻 62・67 と、それらに付された詳細なコメントも評価されるが、特筆すべきは文献目録『18—20 世紀初頭サント・ペテルブルグ=ペトログラドの習俗と見世物文化』55 である (1100 点, 163 ページ)。この分野に必携のビブリオとして貴重であり、18—20 世紀初頭のペテルブルグ文化の中で無視されてきた分野を「復権」させた点で画期的である。

むろん、娯楽はグリャーニエだけでない。常設施設としてのパブリックな庭園や遊園地に関する仕事として、市内における全体像 51・56、ツァールスコエ・セローの事例 33 の他、18 世紀初頭から 20 世紀初頭までのペテルブルグ娯楽文化史概観 45 もあり、ここでは革命前の未来派のキャバレーやさまざまなカフェまで言及される⁽⁸⁾。また、宿屋・酒場・レストラン、さらに商店も、「習俗フィトならびに文学生活のファクト」として文化史の重要なテーマであり 57・76・81⁽⁹⁾、そこで働く人々、特に商人の生活ぶりもコネーチヌイの考察対象となる。19 世紀の商人の生態に関する記述を同時代人の回想や文学作品 (「エスノグラフィックな小説」) から抽出したアンソロジーが編まれ、コメントリーと解説が付された 54・66。ソビエト期には、革命前 (ないし革命後も含む) の商業活動はネガティブに、時に「悪」とされ、商売・商人 (ならびにその描写) は正面から研究対象とされなかったから、それまでの歴史学や文学作品研究にはない斬新な試みである。店舗看板にもコネーチヌイの目は及び 102、それは、有名な『ゴゴリ論』の、市内の看板描写にたいする作家ナボコフのなまざしを思い出させるし、後述のフィトの問題にも通じる。

町のメインストリートたるネフスキ大通りをロシア文学、あるいはペテルブルグの *genius loci* が住む場所と言ってよければ、ここが建築 (史) 学や都市 (計

(8) これがソ連崩壊直後の 1992 年に、奇妙な雑誌「クロークルーム Гардероб 現代のカーニヴァル衣装展」(ペテルブルグ芸術推進協会編集) に掲載されたことには意味がある。しかも、娯楽文化研究がソ連・ロシアで本格的に開始されるにはまだ時間が必要だった。

(9) レストラン等々の施設に関する近年の成果は Ю. Б. Демиденко, Рестораны, трактиры, чайные... М., 2011. サブタイトルは「18—20 世紀初頭ペテルブルグの飲食社会史」。

画) 史, そして何よりもロシア文学研究にとって重要な研究素材であることは改めて言うまでもない。しかし, 後述するペテルブルグ文化史研究の成果を除くと, ネフスキイを「文学的ファクト」として, また, ネフスキイ散策を一つの社会現象ととらえることは, ほとんどなかった。ネフスキイという, 庶民が往来する場としての社会現象の「成立」, 通りの散策文化の形成⁽¹⁰⁾を考えようとしたコネーチヌイの仕事の意義は大きい。具体的には, Г. Т. セヴェルツェフ, П. Л. ヤコヴレフ, В. И. ダーリ, Е. И. ラストルグエフといった, 辞書編纂者ダーリを除くと知られていない作家の文章からネフスキイ散策の記述を拾い上げて編纂し, コメントリーと序文を付した 87。

郊外住宅ダーチャにたいするスタンスも同じである。近年のロシア・欧米でのダーチャ研究に関しては別稿にゆずらざるをえないが, 社会現象としてダーチャの発生, 実体と言説に関するコネーチヌイのコメント (79 は 82 の準備・紹介, 101 は О. Ю. マリノヴァ = トジギアフェタ 『町からダーチャへ』 の書評) は今後さらに進められる可能性を持つ。

こうした、「風俗へのまなざし」(それがピイトという問題系になることは後述) は, 時期的には, プーシキンの時代に意識化され, 言説化されていった。そして, この関心の芽生えをプーシキンと「共有」したのが, 彼の《最大のライバル》たる批評家・文学者 Ф. В. ブルガーリンである。彼が書き残した同時代風俗^{オーチエルク}の観察記録は, 19 世紀ならびにソビエト時代を通して否定的・限定的に扱われてきたが, コネーチヌイは早くから, ブルガーリン著作のイデオロギーや芸術性ではなく, 記述そのものに着目してきた。例えば, 市郊外のグリャーニエとして名を馳せた 5 月 1 日開催のエカテリンゴフの祭については, ブルガーリンの文章に多くのファクトを読み取れるが, この文章も含め, 多数の著作からコネーチヌイが 24 点を選択・編纂したのが 89 である。誤植が多いのが気になるが, 「ネフスキイ歩道散策」「ディナー」「レストラン」「雑貨店」「ダーチャ」「役人」「御者」「古書店主あるいは街頭本売り」等のタイトルからも関心の在り様は明白である。

革命前ペテルブルグ文化を対象とすれば, アヴァンギャルド運動ならびにフォル

(10) 19 世紀初頭のアレクサンドル一世期に散歩は生活スケジュール・日課となり, 流行した。コネーチヌイ 77 は, そのことを具体的な時間と場所, 散歩人 (пешеходец という言葉が誕生した) の順に論じた。

マリズムに関連する著作、多くの亡命芸術家等々の仕事と記録（自伝、回想記等）が視野に入ってくるのは当然である。コネーチヌイはアヴァンギャルド運動やフォルマリズムについて正面から論じることはなく、むしろこの分野ではいわば「黒子」役だが、1916-1919年に活動していたキャバレー「喜劇役者の休憩所」に関する資料翻刻 38、フォルマリストの《最後の弟子》であるリヂヤ・ギンズブルグの草稿「フォルマリスト賛歌」の翻刻 85 その他が注目される。また、「向こう岸からの」ペテルブルグ 50 では、「第一次」亡命者が残した多数の回想記ならびに文学作品からペテルブルグ＝バトログラード関連の記述が素描され、19世紀末－20世紀前半のこの町の“像”を構築する上で大きな示唆を与える。170点以上を挙げた文献目録も貴重である。

同氏の仕事が欧米で早くから評価され、アメリカ、イタリア（そして日本）等へ招待されたことは文献調査の意味からも重要な契機となった。上記文献目録 55 と 50 でその成果が十分生かされた。特に、1994年に始まるイタリア研究者との交流と共同調査は目覚ましい。雑誌 *Europa Orientalis* への度重なる寄稿と編集参加（2003年ペテルブルグ誕生 300年記念号）をはじめ、ロシア人のイタリア表象に関する多くの資料探索・複製・翻刻の仕事 58・92・94・95 は現在も継続中である。また、彼の仕事のイタリア語訳と紹介も盛んにおこなわれている 49・74・103。イタリアのみならず、欧米研究者との交流もペレストロイカ期以降活発化した。彼のグリヤーニエ論考の英訳「人々のための見世物」が論文集『流転する文化 帝政末期ロシアにおける下層階級の価値、実践とレジスタンス』（1994）47 に収録された他、アメリカのロシア文化研究者の協力者としてコネーチヌイとクンパンが大きな役割を果たしたことも多くの研究書の謝辞に明らかである。ちなみに、中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』ロシア語版のロシア関連部分のコメンタリー 70 はコネーチヌイの手になる。

III

コネーチヌイの仕事全体に通底するものを、失われたテキストの復元へのパトス、ペテルブルグ文化史研究の伝統、「フイト」史の構築という三点から考えてみる。

「テキストの復元」と言う時のテキストは、文書館や図書館で見出された公刊・

未公開の作品・論文・草稿・メモ、アーカイヴ資料、回想録・自伝、新聞・雑誌等定期刊行物の掲載論文・記事、また、写真、新聞・雑誌のイラストレーション等々を含む。成果を見よう。

『19世紀末のペテルブルグの生活』（1998）59は国立サンクト・ペテルブルグ演劇博物館手稿部に収蔵されていた或る官僚が書き残した覚書を館員の協力を得て翻刻したもの。「忘れられたペテルブルグ」シリーズ第一冊として刊行された（「ギベリオン」出版社）。1）教会と宗教儀礼、2）家庭生活、3）路上、4）住まいと家事使用人、という構成に明らかとなっており、日常生活のディテールが具体的に記された貴重なテキストであり、コネーチヌイの詳細な調査にもとづく序論とコメンタリー（本文とほぼ同分量）によってまさに「再生」した。しかも、この著者自身が味わいのあるスケッチを残しているのだから、それを収録（163点）したことも同書の価値を高める⁽¹¹⁾。

同「忘れられたペテルブルグ」シリーズ第三冊の作家セルゲイ・ゴールヌイ（1882-1948）のエチュード『サンクト・ペテルブルグ 幻』（2000）63でも本文中のイラストレーションは大きな役割を果たすが、この場合はより大きな意味を持つ。というのも、1925年に出版された初版にはイラストレーションが皆無で⁽¹²⁾、編者コネーチヌイが本文に関連した革命前市内の風景写真のみならず、多数の当時の新聞広告、イラスト、標章を新たに加えたからである。むろん、本文へのコメンタリーも周到で、156を数える。しかも、1920年にベルリンへ逃れたこの作家が帝都の風景を構成する一つ一つのモノの記憶に強く執着していたことが、先のエチュードだけでなく『モノだけについて』（1937）でさらに明確に読み取れることに着目したコネーチヌイは、この二冊を併せて『記憶のアルバム』（2011）91として「造本」し、革命前ペテルブルグのモノへの記憶を蘇らせようとした。それは、1920年代以降の西欧社会に芽生えた亡命ロシア人による文学動向——「ノスタルジーのコレクション、アルバム、過ぎしモノのカタログという新たな文学ジャンルが出現した」⁽¹³⁾——を視野に収めながら、革命前ペテルブルグの^{フイット}雰囲気^{フイット}を逃さぬよ

(11) この本の書評は、坂内知子「一世紀前、ペテルブルグでは……」『なるうど』42（2001）。

(12) 手許にある1925年初版（ミラヴィド出版社）は55ページの粗末な作りの本である。

うという編者の強い意図によるものであり、その気配りは深い。同時代にとって何気ないモノを拾い上げ、時代を映すテキストとする試みの好例である。

草稿「II. A. ビスカリョフ, II. II. ウルラブ, 20世紀初頭ペテルブルグ生活に関する回想」の翻刻82も貴重である。これは1970年代にコネーチヌイ自身が知人から贈られたまま放置されていたもので、内容は、町の通りの様子、家並み、清掃、看板、休日の行進、通りで働き・往来する各種の人々、年間の祭りと行事、交通手段、ダーチャ暮らしといった詳細な生活百科である。19世紀末から20世紀初頭にかけてのこの町の文化・生活を再現する資料として、A. H. ベヌアヤやM. B. ドブジンスキイ、ナボコフといった著名人の記述だけでなく、「名もなき」人々が書き残した資料にも大きな価値があることは当然である⁽¹⁴⁾。

「失われた」テキストとは、ソビエト政権の樹立とともに社会表層から「抹消」され、出版・閲覧を禁じられた、あるいは長らく無視・放置されたテキストである。亡命者が亡命前後に残した作品・記録・回想等々は当然だが、貴族、ブルジョアジー、商人等々が残した記述、あるいは彼らに関する記事も含まれる。また、ナロードの文化も、革命運動との接点なしに研究対象となりえなかった。彼らの伝統的風習や儀礼が、時に過度に「ナショナルな」「迷信的」様相を呈し、祝祭が「無秩序」で「享乐的」な様相を呈して「暴発」することがあるからである。一方で、「真面目な」労働を前提とする社会主義社会では「健康な」集団遊戯こそ推奨されたから、「不真面目な」「個人の」遊びと文化はそれ自体が研究対象になりえなかった。そして、革命前ならびにソ連期に、社会の表層から切り捨てられた（例えば、猥雑、異・畏、卑猥等のレッテルを冠せられた）部分は、そもそも「反革命的」とか「反ソ連」といった単純なイデオロギー的図式とともに、20世紀の学問研究からは排除されたから、グリャーニエに代表される革命前の都市祝祭・見世物文化、その基礎となる遊び・娯楽文化も正面から議論されえなかった。しかも、グリャーニエの時空間を構成する要素があまりにも多種多様で、歴史学、民俗（族）学、演劇

(13) ミハイル・ゾーシチェンコについて記した Ю. Щеглов からの再引用 (91, 20)。

(14) 例えば、高い評判を得て何回も版を重ねている Д. А. Засосов и В. И. Пызин, Из жизни Петербурга 1890-1910-х годов, Л., 1991. また、М. А. Григорьев, Петербург 1910-х годов, Прогулки в прошлое, СПб., 2005 (コネーチヌイが監修者の一人)。

(史)学、芸術学、社会学等の広範な分野に及ぶことから、ソビエト科学アカデミー一付属諸研究所の「縦割り」的な研究対象分割の影響も認めざるをえなかった。その学史的再考は今後の課題として残るが、ロシアの祝祭・見世物文化の一現象としてのグリャーニエは、いわゆるアカデミズムのディシプリンからは「無縁」とされ、ソ連期の人文研究・文化史研究の中で抹消された⁽¹⁵⁾。

帝都ペテルブルグ文化史研究の始まりと展開について、ここでは詳述しない。注目すべきは、19世紀末から20世紀初頭にかけてペテルブルグの歴史と文化をめぐる、きわめて広範な領域で生まれた「新たな発見」あるいは「再発見」と呼べる大きな動きである。世紀をまたぐ大きな社会転換の下、帝都ペテルブルグの芸術・文化活動が先鋭化する中で、この都市をいかに「記述」「描写」するかという問いかけはもっとも根源的だった。その大きな運動体となった《芸術世界》^{ミール・イスクラ・ストヴア}派ならびにアヴァンギャルド運動に関わった多くの芸術家・文学者は、同時代の時空間としてのペテルブルグ文化の「現在・過去・未来」を自らの営為の中核に据えていた。そして、これらの大きな運動と深く関わりながら、“綺羅星のごとく”輩出した人々（В. Я. Кривобобов, П. Н. Стрелбицкий, Г. К. Рубинский, Б. А. Анциферов, Н. Н. Врангел等々⁽¹⁶⁾）がペテルブルグ文化史研究を担う。そして、この研究拠点の一つが、革命前の1907年に創設された「古きペテルブルグ」ミュージアム⁽¹⁷⁾と「古きペテルブルグ=新しきレニングラード」協会（1920/21-1938）であり、ここには上記研究者の多くが集結し、革命前後の環境下にめくるめく活動を行っていた。コネーチヌイはこの協会の全貌を長期間（本人の話によれば、1年に及んだという）の調査によって記述した³¹。また、協会

(15) コネーチヌイ以外にもグリャーニエの重要性を認識し、その研究に着手していた人物として、上記ネクリローヴァの他、回転木馬の「社会学」を目指した A. Г. レビンソンがいた。彼については、注（4）の研究史に関する拙稿（1983）で言及。

(16) ストルピャンスキイに関するモノグラフは И. А. Голубева, Петр Николаевич Столянский—историк Санкт-Петербурга. СПб., 2007. ヴランゲリに関しては、拙稿「ロシア荘園文化の発見——ニコライ・ヴランゲリと彼の仕事」『人文・自然研究』8（2014）を参照。

(17) 現在の国立ペテルブルグ史ミュージアムの前身。「古きペテルブルグの研究と記述」を目的としたこのミュージアムに関しては、取りあえず、注（4）にあげた拙稿の言及を参照。

で活動していたアンツィフェロフ（1889-1958）は1920年代に相次いで発表した三部作——『ペテルブルグの魂』（1922）、『ドストエフスキイのペテルブルグ』（1923）、『ペテルブルグの過去と神話』（1924）——によって高く評価されていた研究者だが、彼の仕事の全貌と生涯はソビエト末期にはあまり知られていなかった⁽¹⁸⁾。コネーチヌイは、すでに41で「ペテルブルグ研究者」としてのアンツィフェロフのバイオグラフィを発表していたが、長らく再版されなかった上記三部作を復刻するとともに、彼の全体像を綿密に紹介した42・43。

アンツィフェロフの師で、西欧中世都市研究の開拓者でペテルブルグ（後にレニングラード）大学教授のイヴァン・グレプス（1860-1941）は1920-1930年代のロシア・ソビエトの都市史研究と郷土学に大きな影響を与えたが、コネーチヌイはこの人物にも着目する。1920年代前半の郷土学（地方学）**краеведение**をめぐる激しい議論の中、1921年に誕生したペトログラード学術＝研究エクスカーシオン研究所の人文部門長の任にあったグレプスの活動を、未刊資料を使って紹介した48。上でふれた31とともに、短く地味ながら、資料の忠実な読解と再構築を実現したものとして高く評価できる。

習俗・風俗、生活様式などと訳されるロシア語「ブイト」**быт**そのものについて述べる紙幅はない⁽¹⁹⁾。ただし、1910-1920年代に活躍したロシア・フォルマリストたちが、明らかに、自らの文学研究を進める戦略にとってこのタームが基本的カテゴリーとして欠かせないと考えていたことは指摘しておく。彼らは、19世紀前半の近代ロシア文学の「成立」を考察する上で、いわゆるリアリズム「前」の、例えば「^{フィジオロギヤ}生理学」や「^{ブイトピサニエ}日常記述」「^{フェリエトン}コラム戯評」に着目し、ブイトを既成の研究の前提たるディシプリンを破壊しうる現実の生・生活・現実（要するに「あり様」「存在」）の「かたまり」として、テキスト分析上の重要な装置とした。例えば、作

(18) アンツィフェロフに関する近年の成果は A. C. Московская, Н. П. Анциферов и художественная местография русской литературы 1920-1930-x годов. М., 2010. ウルバニズム、土地・地方色・郷土学と文学の関連性をめぐるモノグラフである。近年、彼を記念したコンフェランスが定期開催されている。

(19) フォルマリストのブイトへの関心（例えば、「文学のブイト」等）に関しては、取りあえず、近藤大介「日常生活（ブイト）という文化の場 ロシア・フォルマリズムの文学史研究から」『言語社会 1』（一橋大学大学院言語社会研究科）（2006）。

家の移動（旅）は、たんに経歴・体験としての、あるいは、外界・風景を抽出し描写するためのたんなる手段ではなく、モノと心象をより広い社会的・文化的文脈で問い直すために必要な「文学のポイト」とされた。ポイトは抽象的理念や観念ではなく、多種多様な政治的・経済的・社会的制約からなる具体的なモノの総体であり、共時論的分析（例えば、B. M. エイヘンバウムの「ゴーゴリ論」）と通時論的な文学史観（I. O. H. トイニャーノフ、エイヘンバウムの「文学の進化」）の両軸が交わり結ぶ場、換言すれば、横軸としての現存在と縦軸としての時間の交点にポイトは立ち現れる。ポイトは作家の生・生涯の現実と作品との両者の関係性と、その関係性が織りなす場の構造と歴史を説明し、記述する概念装置として求められたのである。こうした問題提起と関心は、1930年代以降の過激なまでのソ連社会化の中で、文学史研究・作家伝記研究の「実証主義」へ「解消」された。1920-1930年代の「フォルマリズムの巢」たる芸術史研究所の命運は『メモアールに見るロシア芸術史研究所』69に詳しいが、コネーチヌイ（彼も2014年までそこの研究員だった）はこの最高の資料集の共編者の一人である。

方法としてのポイトによる文化史構築の動きは、1960年代以降のロトマンらの仕事まで待たねばならなかった。コネーチヌイのポイトへの関心は、彼が共同編纂者の一人となった全二巻からなる百科事典『プーシキン時代バテルブルグの風俗』68に示される。全体の項目数は176、プーシキン作品を読むためだけでなく、ポイトとしての日常誌＝史を構想する上で有益な成果である。彼の執筆項目は「小売店と商店街」76、「散策」77、「宿屋居酒屋」78と少ないが、既成歴史家の視野に収まらない「ジャンル横断的な」記述として貴重である。

IV

アレクサンドル・ベヌアの回想録『わが回想』は、英訳（1955、ニューヨーク）、ロシア語（1960、1964、ロンドン、ただし不完全版）が出版されていたが、ソ連では、それらより遅れて1980年に刊行された（シリーズ「文学の記念碑」、完全版、全二冊合計1400ページ以上、ドミトリイ・リハチョフの序文、1990年に増補第二版）⁽²⁰⁾。その第二巻冒頭の章は「最初の見世物」「見世物小屋」のタイトルに明らかなおと、幼年時代に彼が体験した様々な祝祭と娯楽・遊戯の世界を鮮や

かに記述する。それを読めば、コネーチヌイならずとも、過去への強固なノスタルジーと記憶の「力」を読み取るだけでなく、読者自身の過去の子供時代と現在の自分とを否応なしに重ね合わせることができる。『わが回想』を手にした1980年の出版当時のロシア人、特にレニングラードの人々が、すでにはるか遠い昔、市内の広場で繰り広げられていた祝祭の喧騒とその雰囲気を経験しつつあったのと同時期に、コネーチヌイは過去の祝祭の「すがた」と「かたち」を追い求めていたことになる。彼は革命前ペテルブルグの祝祭に憑かれ、奪われたテキストを求めて雑沓の間を徘徊する「散策者」flâneur だった。

(20) 一部日本語訳は、アレクサンドル・ベヌア『回想録』1-6（坂内知子訳）《瀧波通信》（ネワの会発行）No. 6-11（1985-1988）。